

(一) 文校存続の危機を救った三人

日野範之

「大阪に文学の学校をつくらう」——文校は一九五四年、二十七歳の青年の夢と情熱から出発した。その松岡昭宏さんは戦争末期、朝鮮南部で防戦塹壕を掘っているとき敗戦。

「私の十代はほとんど戦争であった。むろんこの戦争が中国などへの侵略戦争だとは考えることもできなかった。私もやがて戦地に行き、死者たちの列に加わることになるだろう。戦争で死ぬ、天皇ために死ぬことの愚かしさを知りはじめたのは敗戦後であった。私の反戦、反権力への出発点であった」

(松岡『森の宮群落』〇三年刊、『風景18』一〇年刊)

五〇年七月のマッカーサー指令によるレッドパージで、先鋭な組合活動家だとして松岡さんは二千人従業員の紡績工場から追放される。社会タイムス関西総局で仕事しつつ「一生を賭けるもの」を模索した。当時、歌声運動や生活記録運動が盛んで、こうした民衆の表現エネルギーを背景に文学の学校がつかれないか、と。戦後復興の一環だった。

五四年一月ごろ松岡さんは、詩人の小野十三郎さん宅を訪ねる。アナーキスト詩人の小野さんは趣旨賛同し、すぐに「うん、やろう」と。小野さんを講師に五四年三月、試験的に「大

阪詩の教室」開講した。反響は大きかった。

松岡さんは先行する日本文学学校（新日本文学会主催・東京）を訪ね、講義と組ぐみ合あわせせる講座方式のヒントを得る。五四年七月五日、夏の真つ盛りに近い暑い日、森ノ宮の教員会館で大阪文学学校が誕生した（第一期）。

(松岡さん 一九二七年―二〇一五年 享年八十八歳)
こうして始まった自立の文学学校は今年で六十四年目。

私の文校入学は六二年四月、文校八年目という草創期だった。九月に研究科へ。次の年六三年一月から七三年一月までの約十年、事務局を担当した。以後、私は部落解放研究所に移ったので約七年は関わり薄いが、七九年末、閉幕案が出されて文校危機となり、その時から再び参画した。

私の属する真宗教団の七百有余年に比すと文校六十四年は草創期と言っていないのではないか。若さを持つ。文校危機は三度、救った人がある。文校史の一頁として記したい。

横井明恵さん。

日野は本科十七期生入学。当時は週二日が講座日、うち月

*

二回が組会だった。一組担当チューターが横井さんで、ペレ一帽がよく似合う人。励まし上手だった。印象深いのは、本科修了後に自主勉強会を続け、横井さんはこれも助言してくれた。同じ組(クラス)の明石毅さんという大阪ガス退職の人が大阪駅に近い会社サロンを会場として提供してくれた。明石、中村貞子、天津比呂美、橋詰紀義、佃美織、増田秀和、土井宏子さんら同クラス生の名を思い起こす。

勉強会は月々、戦後文学をテキストに交代で発表、私には野間宏『暗い絵』が当たった。集いは一年くらい続いたか。この勉強会は何より私に大きな課題を与えてくれた。

実はその三年前が文校の危機だった。——文校活動の柱である事務局長の松岡さんが五九年五月、大阪市北区の回生会病院に緊急入院したのだ。筋無力症、甲状腺亢進。この時、急場を引き受けたのが松岡さんの連れ合い、横井さん。

当時の事務局は、大阪市北区高垣町の大阪総評わきの倉庫——鳩小屋と呼ぶ狭い建物の一階に、机と本棚一つだけ。横井さんを卒業生らが助け、文校講師やチューター、在校生・卒業生らがカンパを寄せて、松岡さん入院を助けた。

反安保闘争の翌一年、松岡さんはようやく退院できた。

*

高村三郎君(一九四二年～一九九九年 享年五十七歳)

文校は七九年終わり、在校生減少で存続の危機、理事会で閉幕案が出た。火中の栗を拾って文校再建をと、チューター/理事の高村君が動き出し、翌年の三月まで模索が続いた。日野宅にも再々来て「君が担当していた頃の良い経験を

話せ」。危機打開策を一晚中話し合ったこともあった。

チューター会議を再三もち、第Ⅱ次として再出発案が出たとき身を乗り出してくれたのが小島輝正さんで、神戸大学を定年退官したので協力する、と。小島さんは文校第一期からの講師。事務局長を高村君が担い、理事長の小島さんとのコンビで良い船出が出来、順調航海が続いた。小島さん発案で、前身『文学学校』が、誌名『樹林』に改まった。

高村君は長篇小説『泥青空』、句集『春の泥』を残した。

*

木辺弘児さん(一九三一年～二〇〇八年 享年七十七歳)

小島輝正さんが八七年五月に急逝。第Ⅲ次文校として再出発したが、運営者間に不協和音が生じ始めた。二年目、新理事長以下三名が急退任、あと次理事長となった結果、周りの者は運営ノータッチ、専権運営の条件を作った。困難期、財政難で超薄真となった『樹林』を、細見和之さん(現・校長)が灯を消すまいと懸命に編集していた姿は忘れがたい。

九一年初め、校務委員会担当理事の日野に、年配在校生の西村周造さんから再三の電話、理事長と対話が出来ない状態を切々と提起された。閉じられた理事会が混乱の因であるのが明らかに。私などの力不足を露呈した時期だった。チューター/理事の北川荘平さんが調整役を担って諸々相談、理事総退陣でバトンタッチに。チューター/事務局サポートの木辺弘児さんが受け皿となって危機は救われた。木辺さんが葉山郁生さん、高島寛さんらと新態勢を作って今日に。

木辺さんは『沖見』『無明銀河』など秀逸な創作を残した。

(二) 表現に対する切実な飢え

私が事務局担当したのは一九六三年〜七三年。今回、よい機会なので、第1次・文学学校のころの雰囲気伝えておきたいと思う。当時は、環状線・森ノ宮駅から歩いてNHK大阪放送局に近い所にある、大阪市教員会館の部屋を間借りしての教室だった（組会は市立労働会館）。

その頃、二十代を中心とする青春道場の雰囲気と言えた。夜間部が主で、週二日が講座日——三階中会議室が講義場所、受付にいる私に在校生の昼の職場の匂いが伝わってくる。旋盤工場で働く青年はナツパ服のまま来るので機械油の匂い。病院看護婦の女性が来るとクレゾールの匂い。銀行で働く女性がくると、さつきまで数えていたお札の匂いがする。働いているままの装わない姿が文校教室の場にあった。

月二回の組会になると、職場の労働強化など厳しい状況が話され、疎外という言葉が切実に語られた。担当チューターはそれら働く現場の様子や声に共感、ほぼ交通費ぐらいの手当て喜んで参加したものだ。銀行に勤める村上ヒロミさんは「私の手」という詩の一節で、

泡をたて、

よごれた泡をしぼりだすように

手と手をこすりあわせる。

よごれた泡は今日私が働いた証拠。

よごれた泡は私の自由な時間の期待の色になる。

（『大阪文学学校詩集』葦書房 一九六八年）

当時の鮮烈な印象は大阪生野区で縫い子をしていた宗秋月さん。在日一世の逞しい姿を生き生き描いた「チェオギおばさん」を発表。第二回文学集会（一九六七年）で宗さんはその詩を朗読したが、チマチヨゴリを着、胸をはって朗読する彼女の姿は圧倒的だった。大阪でも在日の本名を名乗るのは容易でなかった時代、強烈なメッセージジだった。

本科一年のうち、後半期の組会になって「実は僕は……」と朝鮮名を名乗る青年があった時、「文校という場は、本名を名乗れる雰囲気になってるんだ」と私は嬉しかった。

「この事をどうしても伝えたい」、これを書かねば前に踏み出せないという、表現に対する切実な飢えがあったろう。

また他の活動体とも広く交流があったので、六六年に詩コースに在学した河野里子さんなどは一九七〇年、カストロ首相の呼びかけに応じてサフラ・ボランティア（砂糖キビ刈り隊）の一員としてキューバに半年間、赴いたりした。

(三) 文校教室について

現在の文教教室は一日にして成ったものではなかった。

一九七三年五月に新教室開設されたが、それまで約二十年間は国鉄・森ノ宮周辺の諸会館の部屋を借りての教室だった。独自の自立した教室が欲しいと、在校生・卒業生とその周辺、講師・チューターや、関西の画家・彫刻家・書家などの美術展によるカンパ、演劇人のカンパなどによる頭金を元に、この教室が成ったものであることを記憶しておきたい。